

IV 機関誌『人文研究』総目録（第一集～第一百五十集）

○第一集（一九五四年十一月発行）

ヘミングウェイにおける「ヒリズムの意味
社会科学の立ち遅れ

ニイチエのパスカル問題

十九世紀におけるドイツ国家意識の変遷
原子関係の諸書について

福田信太郎
山本正三
新実一

○第二集（一九五五年三月発行）

半封建的土地所有制と農地改革

ニイチエに於ける「中世紀の終り」

十六 七世紀における西班牙「騎士道小説」

「牧人小説」「悪者小説」の発生と影響

正統と異端
ヤスパーズにおける「包括者」の概念

菅井和雄
大林多吉
操三

○第三集 外国文学・語学特集

（一九五五年六月発行）

John KeatsのOdeについて

D・H・ロレンスにおける対極の観念

ボーデレールにおける交感のソンネについて

芹沢耕幸
相田純作

○第四集（一九五五年十一月発行）

ニイチエにおける革命と反革命

人間・この逆説的なるもの

シュプロンガーの宗教論

イスパニア人の性格

（書評）ヤスパース著『現代の精神的課題』

草薙正夫訳

リルケの『鎮魂歌』におけるテーマについて
"A Farewell to Arms" の主題
詩劇エトナ山上のエンペドクレス
代名詞における格の転用に就いて
"A Friend of Mine" vs. "One of My Friends"

塙須藤小倉勝又秋敏
福田兼吉
山本正三
新実一

○第五集（一九五六年三月五日発行）

ニック・アダムズの脱出

日本農業と「二つの道」論

政治と宗教

（紹介の批評）ヤスパース著『政治と宗教』

山福山
本田田
新操実

森昭訳

ボーデレールにおける交感のソンネについて

ボーデレールにおける交感のソンネについて

ボーデレールにおける交感のソンネについて

『大学の理念』

○第六集 外国文学特集号

(一九五六年七月発行)

トマス・スター・ジムアのガアゼルズを読む
メルヴィルの形成
T・E・ヒューム持論

ラスキンの美学

トマス・ハーディ「ザ・デナスツ」の

構想について

○第七集 (一九五六年八月三十一日発行)

教育学における精神科学的方法

形而上の反抗と自由の問題

ルネサンス (上)

書評 信太正三著『ニイチエ研究』

山 本 耕 新	飯 田 信 作	山 田 太 三	草 本 信 田	山 田 正 三	相 原 一	須 藤 俊 吉	草 薙 正 夫
---------	---------	---------	---------	---------	-------	---------	---------

○第八集 (一九五七年二月発行)

フォイエルバッハ人間学の問題と逆説性
明治前期における農民の動向
晩年のD・H・ロレンス

ルネサンス (中)

山 本 耕 新	飯 田 信 作	山 田 太 三	草 本 信 田	山 田 正 三	相 原 一	須 藤 俊 吉	草 薙 正 夫
---------	---------	---------	---------	---------	-------	---------	---------

○第九集 (一九五七年六月発行)

カントにおける根本悪
煙草作地帶農村史 (覚書異の二)シユプランガーにおけるボン基本法と
青年教育

非西洋における革命

○第十集 外国文学・語学特集号

(一九五八年一月発行)

詩Dauberに描かれた海洋の姿態

T・E・ヒュームとH・リード

「マーディ」について

—メルヴィルの芸術の原型—

日本の詩の英訳について

若きリルケにおける

ヤコブセンの影響について

Cockney—その発音と語法

○第十一集 (一九五八年二月発行)

国家対人間の基礎問題
「地方自治」と地主制の展開

家族的擬制の倫理

社会・科学・技術・文化

山 本 正 新	信 田 太 三	大 田 信 作	山 田 太 三	山 田 正 三	相 原 一	須 藤 俊 吉	草 薙 正 夫
---------	---------	---------	---------	---------	-------	---------	---------

暗号解読 (Chiffresen) ハコトの

〈書 評〉(研究論解説) "Essays in Linguistics"

by Joseph H. Greenberg

杉原 正孝

形而上学 (I)

草薙 正三

〈書 評〉大熊信行著『国家悪』

長井和雄著『シュプランガ』

村信井

○第十一集 (一九五八年六月発行)

○第十五集 (一九五九年九月発行)

人倫の意味構造
ファシズム期の農村新体制
暗号解読としての形而上学

草薙 正三

○第十二集 (一九五八年十二月発行)

○第十六集 (一九六〇年五月発行)

キリスト教の伝播と近代日本
—暗号及び暗号解読の構造—

草薙 正三

○第十三集 (一九五八年十二月発行)

○第十七集 (一九六〇年十一月発行)

喪神群像—其の一「罪と罰」
歴史的未来と教育

草薙 正三

○第十四集 (一九五九年二月発行)

人間学と実存論
トインビー批判

草薙 正三

○第十五集 (一九五九年二月発行)

英語の強意表現考察
—特に強意的直喻について—

草薙 正三

○第十六集 (一九五九年二月発行)

〈書 評〉二つの歴史観
—ブルトマンとレーヴィット—

草薙 正三

○第十七集 (一九六〇年十一月発行)

文明論の先達
喪神群像—其の二「白痴」

草薙 正三

W・B・イエイツー「最後の詩集序説—
エリオット・リード」

信太正三

The Brigs of Ayr

信太正三

Melville's Quest for the Heart in Pierre

信太正三

島津相原須藤兼吉

草薙正夫

島津相原須藤兼吉

山本正三

町村合併と部落

—神奈川県内陸地帯の場合—

ヤスパースの歴史論

○第十八集 外国文学・語学特集

(一九六一年三月発行)

Gates of Damascus

イエイツとエリオット

H・リードの芸術教育論

オルダス・ハックスレイ

—神秘主義への道程—

フーガー・フォン・ホーフマンスタイルと

危機の意識—「帰國者の手紙」をめぐって—

Shakespeareにおけるshall, willの用法について

代名詞考—形態と機能—

須藤	島津	須藤	島津
相原	幸	相原	幸
一	昭	一	吉

○第十一集 外国文学・語学特集

(一九六一年十二月発行)

James Elroy Flecker

詩にみられる三つの要素

H・リードの浪漫主義

The Negro in "Benito Cereno"

オルダス・ハックスレイ

—神秘主義への道程—(下)

ディードロの小説とドイツ

実存哲学者としてのニイチエ

—ヤスパースのニイチエ解釈について—

○第十九集 (一九六一年五月発行)

シユライエルマッヘル教育学の市民的性格
ニヒリズムと永遠回帰

文明論の先達(下)

日本体育史試論

—明治時代以前の体育と衛生—

長井	菊池	須藤	須藤
信太	中村	相原	島津
正三	駿	幸	幸
新	弘	一	吉

○第十一集 (一九六一年九月発行)

ニイチエにおけるニヒリズムの問題

地域社会と行政広報(上)

子供の成長と教育の冒険性

実存と〈交わり〉

日本文明論の近視的性格

山	草	山	信
田	薙	井	太
操	正	和	正
	夫	雄	三

○第十一集 (一九六一年四月発行)

文化的エネルギーと教育
ペシミズムとデカタンス

—「ニイチエにおけるニヒリズム」其の一

長井	草薙	須藤	須藤
信太	正	幸	島津
正三	和	一	幸
三	雄	明	吉

Here, There And Everywhere?

—英文法誌覚え書—

Robynson訳UTOPIA—文法覚え書

山下雅己
松川昇太郎○第十九集（一九六五年一月発行）
—ヤスパースの政治思想
—住民組織論覚え書（1）草薙正夫
山田操

○第二十七集（一九六四年九月発行）

教育学に対する精神史の意義

歴史のことば

スピノザの方法（2）

ニーチェ解釈の方法試論

非西洋の近代化（3）

内村鑑三「おぼえ書き」

長井和
神川正彦
工藤喜作
山信
谷元
藤正
山輝
本新

○第二十八集（一九六四年十一月発行）

疎外の論理と「進歩としての歴史」

—疎外論の克服のために—

住民組織覚え書

—横浜市におけるその経過について—

ハムレット校訂の諸問題

—言葉といふものは弄んでいる間に

—じうにでもなつてしまふ（十二夜）—

スピノザの方法（1）

—幾何学的方法の諸問題—

刺戟伝播
—工藤喜作

山本新

○第二十九集（一九六五年五月発行）
—「一つの形而上學的問いの解剖学—
スピノザの神の因果性について
—文明設定の争点—行政と住民組織の機能—
—歴史の意味への問い合わせ山本新
神川正彦
工藤喜作
草薙正夫
山田操○第三十集（一九六五年五月発行）
—ヴェニスの商人・本文批評—メルビルのアメリカ批判
校訂と「文学」平田満男
向井俊二

—オルダス・ハックスレイにおける

灰色の高僧をめぐつて
—1つの世界の分裂—須藤明
平田満男
向井俊二

Robynson訳UTOPIA

—文法覚え書（補遺）—
ドイツ文の分析松川昇太郎
妹尾幹
山田操○第三十一集（一九六五年十月発行）
—歴史の構図（上）—その「ひねり」と「ふかさ」—
神川正彦

- スピノザに於ける愛のロゴス
〈神の死について〉
- 文明設定の争点 (一)
内村鑑三覚え書 (その一)
- 第二十一集 (一九六六年一月発行)
H・リードの芸術論 (その一)
『恋する女たち』の主題
- 鷗外とスペイン語 (覚書)
コロンブス (一)
—その生立と壮途出発より—
S→NP+VP (一)
—Verb patterns論譜—
NOTAS SOBRE LA
- ENSEÑANZA DEL ESPAÑOL
EL SISTEMA ESCOLAR EN ESPAÑA
EL PRIMER AÑO DEL PLAN DE
DESARROLLO ECONOMICO
- Y SOCIAL ESPAÑOL
- José Antonio
Millán Fuertes
- 平田 満男
- 工藤 喜作
信太 三
山本 新
岩谷 元
輝
- 歴史の構団 (中)
—その「ひねね」と「ふかわ」—
スピノザのコナツスについて
ニーチェにおける運命意識
—一つの覚書—
日本書紀古事記の語彙の比較研究 (一)
—紀記先後の辨資料—
- 江頭 輝雄
会田 由
渡部 登
山下 雅己
Tatsuo Okada
José Mata Trani
- 均衡と崩壊—
歴史の構団 (下)
—オットー・ベッカーの極東外交—
—その「ひねね」と「ふかわ」—
日本書紀古事記の語彙の比較研究 (一)
文明の世代論
- 第二十四集 (一九六六年十月発行)
ドイツの歴史学と極東 (一)
—オットー・ベッカーの極東外交—
三宅 正樹
神川 正彦
富山 吉貞
石川 民藏
相原 一
- 第十五集 (一九六七年一月発行)
H・リードにおけるローマン主義詩論の成立
—「狼への道」—
シェイクスピア本文の不定性
マッシュ・ショウ・アーノルド
Subcategorizationの問題
- 疋中 幸一
平田 幸一
三良 敏男

- 第三十八集（一九六七年四月発行）
歴史における物語性
—歴史のことば（中の二）— 神川正彦
ドイツの歴史学と極東
—（2）第一次世界大戦をめぐる
ヘルツレの研究— 三宅正樹
内村鑑三おぼえ書き（その三） 岩谷元輝
○第三十七集（一九六七年十月発行）
歴史における物語性
—歴史のことば（中の二）— 神川正彦
ドイツの歴史学と極東
—（3）ゲオルク・ケルストの
幕末日本研究— 三宅正樹
内村鑑三おぼえ書き（その四） 岩谷元輝
文明の変動と世俗化（上） 山本新
—世俗化の比較研究—
○第三十九集（一九六八年五月発行）
歴史叙述のコンシスタンス
—歴史のことば（下）— 神川正彦
スピノザの無限と宇宙
歴史の変動と世俗化（下）
—世俗化の比較研究— 三宅正樹
「二つの文化」論争とA・ハックスレー
—文学と科学をめぐる問題（上）— 須藤明
—歴史の認識問題の歴史的定位—
スピノザ聖書解釈の方法について
ワーズワースの般若直観
内村鑑三おぼえ書き（その五）
○第四十一集（一九六六年十一月発行）
「ベニト・セレノ」再考
H・リードにおける正統の探求
—アナキズム論の
○第四十二集 文芸論史的背景とその内容— 相原幸一
テューダー朝前期劇の展開（一）
—道徳劇から風俗劇へ— 平田満男
○第四十三集（一九六八年三月発行）
向井俊二
○第四十四集（一九六八年三月発行）
孤獨と文学（その一）
—ワーズワースの詩心の成長— 近藤正栄

Erasmusの挿したThomas More像	松川昇太郎	近藤正栄
Advanced RPについて	中村駿夫	東保憲
PARKER CHRONICLEの構文		
—統語法と文体の間—	東保憲	
○第四十一集（一九六九年二月発行）		
歴史的説明の諸相		
—歴史の認識（中ノ一）—	神川正彦	岡野哲士
スピノザにおける預言と哲学	工藤喜作	神川正彦
自然法爾と横超		秋山勇造
—宗教と倫理との関わりの問題をめぐる—	信太正三	山下雅己
○第四十三集（一九六九年十二月発行）		
歴史的説明の諸相		
—歴史の認識（中ノ一）—	神川正彦	岡野哲士
ドイツの歴史学と極東（四）		神川正彦
—石井菊次郎とオットー・ベッカーニ	三宅正樹	秋山勇造
孤独と文学（その二）		山下雅己
—『後楽園』におけるセイタンの闘争—	近藤正栄	
○第四十四集（一九七〇年一月発行）		
スピノザの宗教観		
ピューリタンとしてのハルト	工藤喜作	
○第四十五集（一九七〇年三月発行）		
エピクロスの倫理説についての一考察		
国際的コミュニケーションの一般意味論		
—対立と協調のセマンティックス—		
スピノザの宗教観（二）	内村鑑三「おぼえ書き（その六）」	
○第四十六集 文學・語学特集		
（一九七〇年十二月発行）		
黒人問題・一八三二年と一九六七年		
—『ナット・ターナー』の告白論—	向井俊二	
「二つの文化」論争とA・ハックスレー		
—文学と科学をめぐる問題（中）—	須藤明	
孤独と文学（その三）		
—『緋文字』の悲劇性—	近藤正栄	
八千矛物語の成立		
—『鴨首子首の追憶—	近藤正栄	
William Roper. "Life of Thomas More"	佐野正巳	
松川昇太郎		

—「王室紀をめぐるトトマニヤの位置づけ	山田 操	—Peterborough Chronicle 後半の英語について—	東 保憲
自己変容のズハマ	山本 新		
—『虹』をめぐつて— 孤独と文学 (その五) —テスの悲劇—	江頭 輝 近藤 正栄	江頭 輝 近藤 正栄	
ユダヤ作家と読者			
—現代アメリカ文学論譜—	向井俊二	—思想史的破壊の覚書、原理論 (1) — スピノザの国家観 (五)	神川正彦
W・ローバー「スマス・モア伝」その三 —翻訳と注解—	松川昇太郎	—日独伊同盟条件締結要録— 資料と解説 (トセイ)	工藤喜作
A Semantic Analysis of "Put" and Its Analogous Words	Yoshiaki Arai	Function and Meaning of 'Away' in the Verb-Particle Combination	三宅正樹
○第51集 (一九七一年四月発行) ジナルド・キーン「日本文化論」	秋山 勇造	○第51集 文部・語学特集 (一九七一年十一月発行)	荒井 義明
山上の垂訓		（編 久）「日本文化における伝統と近代化」	
—英語訳聖書と宗教的ズハマ (1) — Generation of German Decompound Verbs with Double Determinants Herab, Hinab, etc. and their Co-occurrence Relations with	近藤 正栄	—ワード・S・ズハマ 「夏目漱石と心理小説」— ベンジャマン・コンスタンスにおける 死のイメージ —〈ヘルム〉を中心にして— 山上の垂訓	秋山 勇造
Prepositional Phrases of Place*	荒井 義明	佐藤 夏生	
OE Transition概観	荒井 義明		

○第五十四集（一九七三年一月発行）

世界國家の亡靈

言語のテキストとコンテクスト

—思想史的破壊の覚書・原理論（三）—

スピノザの國家觀（六）

京浜における都市問題の系譜（二）

「日独伊同盟條約締結要録」

資料と解説（下の一・完）

「日独伊同盟條約締結要録」

○第五十五集 二十周年記念特集号

（一九七三年四月発行）

ディアスボラの歴史的意味

言語のテキストとコンテクスト

—思想史的破壊の覚書・原理論（四）—

スピノザの國家觀（七）

孤独と文学（その六）

—ワーズワースとキーツの接点—

ロレンスの文学論についての覚え書

京浜における都市問題の系譜（四）

—関東大震災と横浜復興（一）—

「リッベントロップ覚書」をめぐつて

（総 介）シャイブリー編

「日本文化における伝統と近代化」

（1）エドゥイン・マクレラン

「藤村と自伝小説」

二〇年をかえりみて

人文学会の諸活動

人文学会学生部会議活動

Elne kleine Skizze über Kafkas

英語週日名の語源（一）

And連用の構文について

○第五十六集（一九七三年九月発行）

言語テキストとコンテクスト

—思想史的破壊の覚書・原理論（五）—

スピノザの國家觀（八）

孤独と文学（その七）

—反逆児バイロン—

京浜における都市問題の系譜（五）

—関東大震災と横浜復興（二）—

欧化と国粹

英語週日名の語源（二）

「隨想録」と幽愁の系譜（一）

Friedrich Naumann, das deutsche

秋山勇造

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

- Kaiserreich unter Wilhelm II.
und Japan vor der Niederlage des
Jahres 1945
—Eine Studie über Friedrich
Naumann mit besonderer
Berücksichtigung der japanischen
Geisteswelt— Masaki Miyake
- 第五十七集（一九七三年十一月発行）
言語のテキストとコンテクスト
—思想史的破壊の覚書、原理論（七）—
スピノザにおける国家と自然
米国における言語学と心理学の間（上）
—言語心理学への道標—
（紹 介）シャイブリー編
「日本文化における伝統と近代化」
(二) ロバートH・ブラウアー
「正岡子規と短歌の改革」 秋山勇造
- 第五十九集（一九七四年五月発行）
ラテン・アメリカにおける農地改革の特質
米国における言語学と心理学の間（中）
—言語心理学への道標—
相模国府の所在について
（紹 介）シャイブリー編
「日本文化における伝統と近代化」
(四) エドワード・サイデンスティ
ッカー「小林秀雄論」（その二）
バンジャマン・コンスタン
〈宗教感情〉について 佐藤夏生
- 第五十八集（一九七四年一月発行）
言語のテキストとコンテクスト
—思想史的破壊の覚書、原理論（七）—
ホップズとスピノザ
- （紹 介）シャイブリー編
「日本文化における伝統と近代化」
(四) エドワード・サイデンスティ
ッカー「小林秀雄論」（その一） 秋山勇造
- （紹 介）シャイブリー編
「日本文化における伝統と近代化」
(四) エドワード・サイデンスティ
ッカー「小林秀雄論」（その二） 佐藤夏生
- CAI学習プログラムに関する研究
—デザインと構成上の原則について— 島田昌幸
- Friedrich Naumann, das deutsche
Kaiserreich unter Wilhelm II. und

Japan vor der Niederlage des Jahres 1945

—Eine Studie über Friedrich

Naumann mit besonderer Berü

cksichtigung der japanischen

Geisteswelt—Teil 2. Masaki Miyake

○第六十集（一九七四年十一月発行）

「一つの疎外の構造

—メルヴィル「バーナムジー」論—

ホップズの方法

日向国府の変遷

移民と移住者の概念

—用語の変遷とその歴史的背景—

古医方と国学—国学の成立の基盤—

オネッティの「井戸」をめぐつて

—現代ファン・アメリカ文学賞書—

『ティンタン・アベ』考

○第六十一集（一九七五年一月発行）

谷崎潤一郎の歴史小説

—主として「聞書抄」について—

ネーデルラント共和国とスピノザ

ヘーゲルの教育観について（一）

前川清太郎

—文学と科学の問題をめぐつて—

米国における言語学と心理学（下）

—言語心理学への道標—

伊藤克敏

—「法の哲学」を中心に—
中世スペインにおける
ユダヤ人の役割について
孤独と文学—理想美追求のシェリー—
接尾語-le, -erを持つ動詞（一）
ウイックアム・ワーズワースの「逍遙篇」
(*The Excursion*)に関する一考察

岩崎豊太郎

黒沢惟昭
藤田一成
近藤正栄
荒井義明

○第六十二集（一九七五年六月発行）

ホップズのコナツス

転換期のソ連外交—課題と展望—

古文辞学と国学—言長学成立の基盤—

英語教育の中の評価（やの一）

—Criterion-referenced Test—

個別学習機器とその評価（一）

大友賢二

島田昌幸

○第六十三集（一九七五年十月発行）

ヘーゲルとイントロダクション

難民の概念

A・ハックスレー

—文学と科学の問題をめぐつて—

米国における言語学と心理学（下）

—言語心理学への道標—

伊藤克敏

須藤明

—文学と科学の問題をめぐつて—

米国における言語学と心理学（下）

—言語心理学への道標—

伊藤克敏

石井陽一

- 〔註〕マーカス・ガーヴェイの幻の国家
ウイリアム・ワーズワースの「逍遙篇」
(*The Excursion*)に関する一考察(一) 岩崎豊太郎
Auto Sacramental (I)
- (聖餐神秘劇) その型式と定義 岩根圓和
- 第六十四集(一九七六年四月発行)
スピノザの「書簡集」の研究
インド論理学入門(上) 湯田工藤喜作
- 十八世紀スペインにおける農業問題の本質
—土地所有メカニズムの解明— 藤田秋山勇造
- 永井荷風—詩心のゆくえ
ウイリアム・ワーズワースの「逍遙篇」(The Excursion)に関する一考察(II) 岩崎豊太郎
Auto Sacramental (II)
- Examen Sacrumへ題する一篇について 岩根圓和
- 第六十五集(一九七六年九月発行)
老人サンチャゴにおける職業人の人間像
インド論理学入門(下) 湯田向井俊二
- 高度宗教の本質剥離
- 〔資料紹介〕マリオ・A・マナコルダ 黒沢惟昭
- 「グラムシの教育思想」
- 第六十六集(一九七七年一月発行)
社会ダーウィン主義の「機能転換」(上)
社会教育の国家論
—「一つの社会教育の媒介の論理—
トインビーのルネサンス観
セーザル・バリエッホをめぐる一考察
—その一— 大林文彦
- ウイリアム・ワーズワースの「逍遙篇」(The Excursion)に関する一考察(IV) 岩崎豊太郎
- 第六十七集(一九七七年四月発行)
ウパニシャッドの哲人シャーンディリヤ
—再評価— 湯田藤田一成
- 反ユダヤ主義の構造
社会ダーウィン主義の「機能転換」(下)
—アメリカ革新主義教育思想研究(II)—
ヘーゲルの教育観について(II) 森田尚人
- 「法の哲学」を中心に— 黒沢惟昭

"Things rank and gross in nature"
—A study of Hamlet in terms of
melancholy (I)
Tsuyoshi Hashimoto

—「ブラック・マズリムズを加えて— ルネサンス文学の二つの流れ（上） — 文学批評の原理と英文学（二）— ホールデン・コールフィールドにおける リグ・ウェーダーの創造讃歌について トルコの欧化による世俗化 ヤコービにおける理性と悟性 接頭辞 pro. を持つ英語派生動詞（二） 積木分類課題におけるティーチング・ スタイル・日米の母親と教師の比較	疋田 三良 近藤 正栄 向井 俊二 湯田 豊二 山本 新二 工藤 喜作 荒井 義明 渡邊 恵子 工藤 喜作 山本 新二 湯田 豊二 向井 俊二 湯田 豊二 向井 俊二 青木 康征	接頭辞 pro. を持つ英語派生動詞（二） 『コロンブス研究』（その一） コロンブスの結婚をめぐつて クラター事件における アメリカ的フィクションの完成 —『冷血』論— ウパニシャッド —古代イハバの呪術の世界— 『グラスニアの住居』（Home at Grasner） に関する考察（下）	荒井 義明	
○第七十三集（一九七九年三月発行） シェリング研究序説 『自我について』を中心にして 類型化と理念化 宇佐見瀬水伝記考証序説 「三面」の一特質 —「士人出世談」をめぐつて— 北攝農村の農地改革—箕面市の場合— 昭和五十三年度 人文学会活動報告 El Alcalde de Zalamea, 糀殻のイメージについて	工藤 喜作 佐木 修一 鈴木 正巳 山口 建治 宮野 隆治 岩根 圭和	渡邊 恵子 工藤 喜作 荒井 義明 渡邊 恵子 工藤 喜作 山本 新二 湯田 豊二 向井 俊二 湯田 豊二 向井 俊二 青木 康征	○第七十五集（一九八〇年一月発行） 「オスカー・ワイルド」の童話の考察 『コロンブス研究』（その二） コロンブスの結婚をめぐつて ルネサンス文学の二つの流れ（中） — 文学批評の原理と英文学（三）— 初期仏教—再検討— Mississippi Diary 接尾辞 -le, -er を持つ動詞（一）	小泉 公史 青木 康征 湯田 豊二 近藤 正栄 湯田 豊二 E.M.Carmichael 荒井 義明

- | | | |
|-------------------|---|-----------------------|
| ○第七十六集（一九八〇年四月発行） | マラマッドの文学におけるユダヤ人
ルネサンス文学の二つの流れ（下） | 向井俊二 |
| ○第七十七集（一九八〇年九月発行） | —文学批評の原理と英文学（四）—
接尾辞-le,erを持つ動詞（三） | 近藤正栄 |
| ○第七十八集（一九八一年二月発行） | ItalaとVulgata俗ラテン語研究（II）
ドイツ亡命とチェコスロvakia | 近藤正栄 |
| ○第七十九集（一九八一年四月発行） | （一九三三）～（一九三八）（II）
—文学批評の原理と英文学（五）—
積木分類課題におけるティーチング・スタイル—その二：事例研究 | 中村浩平 |
| ○第七十集（一九八一年九月発行） | マキアヴェリのFortunaとVirtùについて
ジャイナ教の教義 | 工藤喜作 |
| ○第七十一集（一九八二年二月発行） | マラマッドの文学におけるユダヤ人（続）
『コロンブス研究』（その三） | 湯田豊 |
| ○第七十二集（一九八二年九月発行） | マラマッドの文学におけるユダヤ人（続）
コロンブスの結婚をめぐつて
ヘーゲルの教育観について（三）
—『法の哲学』を中心にして— | 向井俊二 |
| ○第七十三集（一九八三年二月発行） | 青木康征 | 黒沢惟昭 |
| ○第七十四集（一九八三年九月発行） | 満州移民と農地改革
—長野県旧大日向村の事例—
ヴァイシエーシカ哲学 | 黒沢惟昭 |
| ○第七十五集（一九八四年二月発行） | 再びスペイン語の再帰文について
ワーズワースの『マイケル』について
バーナード・ショウのラファエロ前派劇
「キヤンデイダ」についての考察 | 湯田豊 |
| ○第七十六集（一九八四年九月発行） | 佐藤夏生
工藤喜作
中山新作 | 岩崎豊太郎
橘川慶二
小泉公史 |
| ○第七十七集（一九八五年二月発行） | 文学と文明
故山本新先生を悼む
バンジャマン・コンスタンにおける死 | 鈴木英允 |
| ○第七十八集（一九八五年九月発行） | 悲劇的効果の一断面（一） | 鈴木英允 |

- 八十五集（一九八三年三月発行）
 フィヒテの「自己規定への要請」について 工藤喜作
 ロマン主義文学
- 文学批評の原理と英文学（七）— 近藤正栄
 El verbo ser en el español coloquial
- 歴史学と歴史人口学（その一） 岡島千幸
 José A. Millán
- 第八十六集（一九八三年九月発行）
 ユダヤ人に対する血の中傷
 —儀式殺人および聖体冒瀆をめぐって— 藤田一成
 地域区分論から類型論へ
- 研究史的反省から—
 ある幻影の未来 —フロイトと宗教— 宮井豊
 リヒャルトの言語発達と家庭環境 渡邊恵子
 その一 家庭環境要因の言語能力群差の分析
- 第八十七集（一九八三年十一月発行）
 『コロンブス研究』（その五） 青木康征
 コロンブスの結婚をめぐって
 内村鱸香伝記考証序説（上） 佐野正巳
 ラ・ガアルディア村儀式殺人事件（一）
 一スペインにおける血の中傷 トインビーと宗教（一）
 藤田一豊 成
- 第八十八集（一九八四年三月発行）
 近代合理主義文学（前期）
 —文学批評の原理と英文学（八）— 近藤正栄
 ラ・ガアルディア村儀式殺人事件（二）
 一スペインにおける血の中傷
 「拍案驚奇」に描かれた女性
 —トインビーと宗教（二）—
 トインビーと宗教（二）
 〈書評〉『スペイン帝国の興亡』
 一四六九～一七一六 宮井隆
 Walter Paterの短篇小説における
 特質の考察
- 第八十九集（一九八四年九月発行）
 歴史学と歴史人口学（その二） 小泉公史
 近代合理主義文学（後期）
 —文学批評の原理と英文学（九）— 近藤正栄
 グラムシのヘゲモニー論をめぐる
 若干の問題点（上）
- 高度技術社会における日本の経営と労働者 横倉節夫
 William Morrisカーネギア
 「無何有郷だより」の研究 小泉公史

—片桐薰『ヨーロッパ社会主義の可能性』 を読んで—	黒沢惟昭	鈴木修一
詩劇と伝統 —『元老』からみた		伊藤克敏
T・S・エリオットの文学像—	ジョン・ボチャラリ	
○第九十集（一九八四年十二月発行） ヘミングウェーにおける		
スポートの論理と効用 —"Soldier's Home"を中心にして ウパニシャッドの哲学について Glossa Silenses 研究 I 二つの「羊飼いの劇」 —ジャック＝ガルキオとマック（I）— 〔研究懇話会報告〕マンハッタン・オデュッセイ (一九七七)一九八二)	向井俊二 湯田豊正 太田強正 橋本侃	湯田 豊
○第九十二集（一九八五年九月発行） 西洋哲学史の学び方 コメニュウス・ルソーの「自然」と「教育」(上) —鈴木秀勇教授の 教育研究方法意識に触れつつ— われわれとは何か —現象学における「共同人間存在」の問題— 明治末年の鷗外 抒情詩の表現様式 —「四季」派における主体と時間の展開— 『西遊記』と神話・祭祀 内村鶴齋伝記考証序説『中』 読書の現象学への序説 エズメの苦界	黒沢惟昭 鈴木修一 橋本侃	鈴木修一 伊藤克敏
○第九十一集（一九八五年二月発行） 『息子と恋人』の一側面 —父と母と子の関係— 中世スペインにおける王族とユダヤ人の関係 —ユダヤ人待医をめぐつて— ヘーゲルとドイツ初期ロマン主義	江頭輝雄 藤田一成	前川清太郎

- | | | | |
|---|---|---|--|
| ○第九十五回集（一九八六年九月発行） | 『恋する女たち』にみられる否定的要素 | 太田強正 | 江頭輝雄 |
| ○第九十四回集（一九八六年三月発行） | 「歌行燈」考 | 太田建正 | 江頭輝雄 |
| ○第九十六回集（一九八六年十一月発行） | カルデロン劇の人々
「エニヤ・メンシアについで」
人文研究とわたくし
エピクロスが愛し求めた知
—キケロの批判を介しての考察—
「幼児音と方言音との
相関性に関する一考察」 | 岩根園和
湯田豊
岡野哲士
伊藤克敏 | ジョン・ボチャラ
ジョナ・ボチャラ
吉岩井嘉蓉子 |
| ○第九十七回集（一九八七年三月発行） | PERSONA HUMANA Y SOCIEDAD
en la filosofía de J. Maritain
Amadeo Illera B.
Glosas Silenses研究III | 古岩井嘉蓉子
橋本侃
江頭輝雄
太田強正 | 岡野哲士
湯田豊
江頭輝雄
太田俊二 |
| —Salinger, "For Esme-with Love and
Squalor"に関する一考察—
リグ・ヴェーダの哲学詩
青春の模索—ポール・モエルの場合—
馮夢龍と「開説の変」
—馮夢龍事跡考—
Glosas Silenses研究II | 向井俊二
湯田豊
江頭輝雄
山口建治
太田強正
ENCOUNTER
WITH COLIN PEACOCK
a psycholinguistic approach to
teaching writing
Harumi Kurotani | 岡野哲士
湯田豊
江頭輝雄
吉岩井嘉蓉子
江頭輝雄
太田俊二 | エピクロス思想の成立を探ねて—
—その生き方と人間觀を中心にして—
旧約聖書
文学作品についての言語學的
文体論の一考察 |

- | | | | |
|--|--|---|--|
| カルデロン作
「密かな屈辱に密かな復讐」ならびに
「不名誉の絵師」の人物
—レオノールとセラフィーナの | 罪をめぐつて—
岩根園和 | ○第九十九集 小沢勇教授退職記念
(一九八七年十一月発行) | 村田泰彦・伊藤克敏 |
| （翻訳）チエスター＝サイクル劇（II）
オルダス・ハックスリーと短編小説（上）
—「サー・ハーキュリーズ」を中心として—
『会話能力の発達過程に関する一考察』
フル退場—問題劇の視点— | ウ・パニンヤッジ、V
湯田 橋本 侃
須藤 伊藤 克敏
佐久間直子 明 | 小沢勇教授略歴・送る言葉
地理学の総合的立場と国家社会の理念型
脱近代化の目めさす課題
『チャタレイ夫人の恋人』について
—生命の優しさ—
江頭輝雄 | 宮井 隆
近藤 正栄 |
| ○第九十八集（一九八七年十月発行）
日本赤十字奉仕団成立史稿（二・完）
—大阪を中心として—
吉原直樹 | 高野繁男
黒沢惟昭
橋田豊
侃 | （翻訳）チエスター＝サイクル劇（IV）
ヴェーダーナタの精髄（II・完）
日本語教育に関する比較考察
—イギリス、スイス、並びに日本の
大学のケースについて—
CHARLES PEGUY et MAXIME
VUILLAUJME autour de la publication
de « MES CAHIERS ROUGES » (2)
（翻訳）チエスター＝サイクル劇（III）
CHARLES PEGUY et MAXIME | 東保憲・橋本侃
伊藤克敏
橋田 橋本 侃
伊藤克敏
上條雅子 |
| 安部公房の文体
—『棒』『砂の女』の表現様式—
アントニオ・グラムシの教育論への序章
ヴェーダーナタの精髄（I）
（翻訳）チエスター＝サイクル劇（III）
CHARLES PEGUY et MAXIME | 赤十字奉仕団の活動（一断面） | 吉原直樹
（翻訳）チエスター＝サイクル劇（I）
橋田豊
侃 | Kiyoshi KURATA
古岩井嘉蔵子
山口建治 |

（資料）『人文研究』総目録・執筆者目録 他

— 日赤大阪府支部奉仕課『農繁保育
所関係書類』（昭和二十一年度）—

吉原直樹

○第百集 人文学会二十五周年

『人文研究』第百集記念号

（一九八八年三月発行）

人文学会二十五周年・『人文研究』

第百集を祝つて

山田操・向井俊一
大林文彦・神川正彦

虫西治・工藤喜作

前川清太郎

近藤正栄

大衆化時代の宗教—解放神学研究（一）—
現代DDR文学をめぐる

一二、三の問題について
—ビーアマン事件以後（下）—

塚田眞幸
伊藤克敏

欧米における幼児言語獲得研究の沿革
ブリハッド・アーラニヤカ・
ウパニシヤッド、VI—1—3

—原典および解説—

（翻訳）チエスター＝サイクル劇（V）
（研究ノート）土地と人のパンセ

（資料紹介）明治前期に於ける一真言

—『觀音寺日譜』を素材にして—
宋寺院の研究（その二）

中島三千男

○第百一集（一九八八年十月発行）

農地改革と農業雑記
グラムシにおける「存在」と「當為」

—「実践の哲学」研究・序論—

黒沢惟昭

神学の解放・解体

—解放神学研究（2）—

近藤正栄

（翻訳）チエスター＝サイクル劇（VI）

（研究ノート）近代における社家身分の再編過程

—大山崎離宮八幡宮を素材として—

（書評）上條雅子・黒沢惟昭・鈴木陽一共著

『近代の再検討—ポスト・モダンの視点から』久田弗明

（書評）上條雅子・黒沢惟昭・鈴木陽一共著

『近代の再検討—ポスト・モダンの視点から』久田弗明

○第百二集（一九八八年十二月発行）

マイ・シカゴ・ストーリー

—1920年代都市的世界—

エピクロス思想における「思慮」

—「哲学する」ことを再検討する試み—

反キリスト（1）

第三革命の神話

—解放神学研究（3）—

（翻訳）チエスター＝サイクル劇（VII）

（研究ノート）土地と人のパンセ

（資料紹介）明治前期に於ける一真言

—『觀音寺日譜』を素材にして—

宋寺院の研究（その二）

中島三千男

宮井 隆

吉原直樹

黒沢惟昭

近藤正栄

中島三千男

橋本侃

近藤正栄

Thomas Middleton's Comedies and the Morality Convention	Hiroko Okuda	近代スペインの一局面 —マドリッドへの遷都をめぐって—	藤田一成
王權と女性排除		反キリスト(2)	
—Macbethをテキストにして—	佐久間直子	大衆宗教の無脊椎化	
○第41集 (一九八九年二月発行)		—解放神学研究(5)—	
「思想戦」の論理と操作性	渋谷重光	（翻訳）チエスター＝サイクル劇(X)	近藤正栄
占領期横浜における町内会の一動向		—反キリスト(3)	橋本侃
—弘報委員会の創設過程を中心として—	青原直樹	擬装されたヒューマニズム	湯田豊
（翻訳）チエスター＝サイクル劇(VIII・IX)		—解放神学研究(6)—	近藤正栄
歴史と救済史 —解放神学研究(4)	近藤正栄	『コロンブス研究』(その六)	
Robert Arnin's Hamletで何を演じたか		—コロンブスの結婚をめぐって	
—Shakespeareと1600年頃のロンドン演劇界—	佐久間直子	—「トスカネリの畫簡」(下)—	
関する若干の問題点	黒沢惟昭	ガエネツィアと文人たち(一)	
—松田博編『グラムシを読む』を読んで—		—バイロンとガエネツィアの	
○第42集 宮井隆教授追憶		〈自由〉あるいは〈圧制〉	
官井隆教授略歴・業績一覧		（翻訳）チエスター＝サイクル劇(XI)	
追悼文		Glosses Silenses 研究IV	
山田操・和崎春日		（書評）黒沢惟昭著『國家と道徳・教育開催状況	
墨沢惟昭		（学会報告）第36回日本社会教育学会	
井上正	黒沢惟昭	—物象化事象を読む—	

—シェイクスピア、ジョンソン、コリヤッ ト、モリソンとヴェネツィアの墮落	鳥越輝昭	（翻訳）中国古代音楽史稿（1）	吉川良和
（翻訳）チエスター＝サイクル劇（XV）	橋本正也	（翻訳）チエスター＝サイクル劇（XVI）	侃清
（書評）日本社会教育学会編『現代的人権と社会教育』	嶺井正也	（人間と神の恋と）	岩根和
○第百十集（一九九一年十月発行）	小泉公史	人間と妖怪の恋をめぐつて	張競
ショウに至るイギリス社会劇の推移について	張競	シャルル・ペギーの宗教思想（四）	吉川良和
辺境文化の南下と新しい恋	湯田豊	（叙事詩『エヴァ』の構想とその神学）	侃清
パタンジャリの『ヨーガ・スートラ』	湯田豊	（翻訳）チエスター＝サイクル劇（XVII）	侃清
シャルル・ペギーの宗教思想（三）	須藤明	チャーチード・ギヤ・	岩根和
—『紅楼夢』をめぐつて	倉田清	ウバニ・シャッド第5章	吉川良和
オルダス・ハックスリーと短編小説	須藤明	（翻訳）明治期におけるポウの翻訳	侃清
（中の二）—揶揄を免れた主人公—	倉田清	大学制度とドイツ・ロマン派	吉川良和
ヴェネツィアと文人たち（六）	須藤明	（翻訳）私と中国語	侃清
ズと、ヴェネツィアの宗教、政治、	鳥越輝昭	鬼来迎—考—日本における仏教芸能の一表現	吉川良和
そして魅力の衰え	橋本侃清	語りもの『白蛇伝』の民俗	侃清
（翻訳）チエスター＝サイクル劇（XVI）	山口建治	（翻訳）『義妖伝』研究算書（二）—	吉川良和
弾詞『義妖伝』校注試稿（二）	竹田正之	（阿Q正伝）と「藤野先生」について	吉川良和
（講演録）現象学と世界体験	青木和清	（阿Q正伝）と『山海經』をめぐつて	吉川良和
ローベ・デ・ベガ作『処罰にして復讐にあらず』	岩根和	（人間と神の恋と）	吉川良和
○第百十一集（一九九一年十一月発行）	（人間と神の恋と）	（人間と妖怪の恋をめぐつて）	吉川良和
恋物語における超自然的イメージの意味	（人間と神の恋と）	（人間と妖怪の恋をめぐつて）	吉川良和
（人間と神の恋と）	（人間と妖怪の恋をめぐつて）	（人間と妖怪の恋をめぐつて）	吉川良和

—保姆から聞いた「長毛」(太平天国)の話— 小島晋治

東西文化衝突の中の『椿姫』
—最初に西洋の変遷を伝えた作品として—

張競

『横浜貿易新報』を通して見る
出土文献から見た秦漢以前の
在留中國人のありよう

大里浩秋

（翻訳）チエスター＝サイクル劇（XVII）
—キリストの黄泉陛下—

橋本

「若」と「如」について
試談对外漢語的教學方法
七夕の伝説と祭祀習俗

王酒珍

（講演記録）イギリス・ロマン主義の
特徴について

岡地嶺

故・鈴木英允教授追憶号
（一九九二年五月発行）

鈴木陽一

ワーズワースの詩の世界—心の絵画—
再びセルバンテス、

岩崎豊太郎

○第百十三集 故・鈴木英允教授追憶号

（一九九二年五月発行）

故・鈴木英允教授略歴
追悼文

岡野哲士・荻原悌二

『アルジェの物語』の韻律について
教育音声学—テキストの編纂—

吉川良和

ニーチェ哲学入門

シャルル・ペギーの宗教思想（五）

湯田豊

（翻訳）中国古代音楽史稿（2）
○第百十四集（一九九二年十月発行）

—〈罪と恩寵〉についてのペギー的

倉田清

（翻訳）エネツィアと文人たち（八）
—ド・ブロス議長と美醜の混在する

逆説と現代文学におけるその展開—

倉田清

快楽の都エネツィア—

ヴェネツィアと文人たち（七）

高橋喜郎

芥川龍之介とドイツ文学
感動詞的呼びかけ語の変遷（II）

—アディソンと「権略」の都ヴェネツィ

秋元美晴

—明治時代から昭和時代にかけて—
文献に見出せる冥婚習俗とその意味

アにおける「美」の不在、ギボンと
〈醜惡〉かつ〈貪欲〉なヴェネツィア—

鳥越輝昭

感動詞的呼びかけ語の変遷（I）
—明治時代から昭和時代にかけて—

感動詞的呼びかけ語の変遷（I）

秋元美晴

（翻訳）チエスター＝サイクル劇（XVIII）

深澤俊昭

日本語文韻律素論（I）

○第百十五集（一九九三年三月発行） ショーベンハウアー哲学における争点 道徳と道具	吉川良和	（翻訳）中国古代理楽史稿（3）
—道具との類推においてみられた道徳と 道徳の哲学の可能性—	湯田 豊	（翻訳）中国古代理楽史稿（4）
—八世紀末エンサイクロペディア理 念における『一般的草稿』の位置—	大西正人	「ソフィー・ブリスト」についての一考察 （九九三年四月発行）
シャルル・ペギーの靈性（六）	佐藤朋之	（翻訳）中国古代理楽史稿（4）
—内的現実の探究（1）— ヴェネツィアと文人たち（九）	倉田清	横倉節夫 岡野哲士・三星泰雄
劣等な政体ならびに倫理的堕落 そしてゴシック様式への評価	鳥越輝昭	渋谷重光教授略歴・業績 追悼文
（翻訳）チエスター＝サイクル劇 （XIX&XX）	橋本侃	現代日本における社会変動 —技術革新・労働力の質の変化 その地域的展開—
「心」の英訳について 発話末における日本語接続詞「けど」	秋山勇造	横倉節夫
文武両道—流鏑馬	井谷玲子	（翻訳）チエスター＝サイクル劇（XIX）
日本語文韻律素論（2）	吉澤俊昭	（翻訳）チエスター＝サイクル劇（XX）
（研究ノート）ラオドール・ラオンターネの		（翻訳）チエスター＝サイクル劇（XIX&XX）
「心」の英訳について 発話末における日本語接続詞「けど」	湯田豊	（翻訳）チエスター＝サイクル劇（XIX）
座田司氏の八幡神の本質に関する梗概の 注釈付き翻訳（1）序文付き	橋本侃	（翻訳）チエスター＝サイクル劇（XX）
日本語文韻律素論（3）	吉澤俊昭	（翻訳）チエスター＝サイクル劇（XX）
（翻訳）中国古代理楽史稿（5）	吉川良和	（翻訳）中国古代理楽史稿（3）

（翻　訳）中国古代理楽史稿（11）　吉川良和

（翻　訳）中国古代理楽史稿（11）　吉川良和

シャルル・ペギーの靈性（八）

倉田清

○第百一十三集（一九九五年三月発行）
比較思想の未来

明治期の翻訳者（3）若松賤子

湯田勇造

「対神徳」の優位と、《希望》の秘義——
ヴェネツィアと文人たち（十五）

鳥越輝昭

ヴェネツィアと文人たち（十四）
—W・C・ハズリット、ブルクハルト、

鳥越輝昭

宗教ならびにバロック建築——
ゴーティエ、テヌとヴェネツィアの

湯田勇造

（講演記録）戦後生活のなかで戦争を考える

鳥越輝昭

「自然の色彩の測色データおよび
色名による分析——
レイコフの挙げた迂回表現の再分析..

三星宗雄

（翻　訳）「学徒出陣」五十年によせて——
ジョルジュ・サンドー・晩年の小説

田中正俊

——関連性理論からの説明
『とん限り樅の木の国』試論..

井谷玲子

（翻　訳）中国古代理楽史稿（12）
植物、比喩、時代の「病い」

吉川良和

譯訳の解剖（2）
中国古代理楽史稿（13）

吉川広哲

○第百一十四集（一九九五年九月）

明治通俗小説繁榮的原因探討

初期ヘーゲルにおける〈愛〉の変容
——ロマンティシズムからアリズムへ——
王士禎と袁枚

伊坂青司

——カルロス五世の退位（一）——
——ブルゴニュ公爵からの退位（一）——
——シェイクスピア劇の宗教性

藤田一成

——晴代康・乾期の詩風の変化——
——宗教抗争の狭間での創作活動——

橋本勇

——『人生は夢』のバロック性
——セヒスムンドとロサウラの

明治期の翻訳者（4）内田魯庵

秋山勇

○第百一十八集（一九九六年十二月発行）

明治文学界とツルグーネフ

F・W・フェルスターの公民教育論

ブラシュナ・ウパニシヤッド

秋山勇造

○第百三十集（一九九七年九月発行）

—詐欺師としてのウエスタヴェルト像—
公平の原理と道徳

田坂ヨシ子

湯田豊

—シャールル・ペギー—
実証主義の博士たちに抗して
カルロス五世の仮寓生活

山口さつき

フランス語の拡張と少數言語の抑圧
—抑圧される側からみた—

秋山勝也

—現代世界への近代世界の超克—
マリア信仰の原型

横倉節夫

シャルル・ペギーの靈性（十一）
思想の源泉（二）

白井盛利

—ハランデイーリヤにおける12週間—
末松謙澄—生涯と業績

秋山勇造

モーリス・バレスと死の町ヴェネツィア
—ヴェネツィアと文人たち（十八）—

鳥越輝昭

—プロフェッサーとドクター—
ヘンリー・ジェイムズの

秋山勇造

○第百一十九集（一九九七年三月発行）

原抱庵—生涯と業績—

秋山勇造

—アメリカ人詐欺師—
Glosses Silence研究VI

山口ヨシ子

ダーム（意中の女性）からノートル・

秋山勇造

—猿田勝美教授退職記（序）—

太田強正

カルロス五世の晩年

秋山勇造

—ユステ修道院への道（二）—

横倉節夫

ヘッセと生ける町ヴェネツィア

秋山勇造

—ユステ修道院におけるカルロス五世（一）—

藤田一成

—ヴェネツィアと文人たち（十九）—

秋山勇造

—ピクチャレスクとワーズワースの想像力—

瀬沼夏葉

プライズデイル・ロマンス

岩崎豊太郎

—生涯と業績—
歴史学者ホレイシオ・ブラウン

とヴェネツィア

—ヴェネツィアと文人たち(20)—

鳥越輝昭

(翻訳)コヴェントリー＝サイクル劇(1)

—「聖体」と呼ばれる劇—

岡島千侃

カルデロン・『サラメアの村長』

—ドン・メンドとラサリーリヨー—

岩根園和

「西部の蜂起」について(1)

岡島千侃

○第32集 テリーウィン先生追憶(1)

(一九九八年三月発行)

テリー・リー・シャーウィン先生の死を悼む

中島三千男

テリー・リー・シャーウィン先生のこと

笠間千浪

サブカルチャー研究の今日的意義について

湯田豊

—インド的一神教のルーツ—

橋本侃

長田秋濤—生涯と業績—

橋本侃

(翻訳)コヴェントリー＝サイクル劇(2)

日本語動詞パラダイムについて

岩崎豊太郎

ターナーとコンスタブルの都市幻想

—名譽の医師』・ローベからカルデロンへ

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

英語母語話者による

ピッチアクセントの習得

前田マーガレット

—中国語学科退休教授三人談—

尾上襄・小島昌治
松本昭

『オセロウ』から『ドン・カズムーロ』へ

—主人公の「嫉妬」を中心見た

ブラジル版オセロウの翻案

武田千香

1930年代初期

中国共産黨の内部肅清の実態

小林一美
大里浩秋

石川伍一のこと

○第百二十四集 倉田清教授退職記念号

(一九九八年十二月発行)

中本信幸

キム・レイホ

小説における引用 (intertextuality)

—『西湖』に引用された

「意象的直観」のひと

—ムツシュー・クラタ贊

マイトラーヤニーヤ・ウパニシャッド (2)

翻訳および解説

湯田 豊

ユーステ修道院におけるカルロス五世 (3)

—その隠遁生活と死—

胡

ツエは中国語にあらざるや

藤田 一成

湯田 豊

—胡乱

—『うそ』の語源は中国語の

橋本 侃

名詞中心の統語論 (2)

中国的民間反語

—秘密語研究—

松山 正男

那須先生の死を悼む

胡説

か? 補説

（翻訳）コヴェントリー・サイクル劇 (IV)

香港の大学の現状と展望

胡説

か? 補説

松山 正男

日米関係の起源について

山口建治

山口建治

（翻訳）ウリアム・マコウミ

香港の大学の現状と展望

山口建治

山口建治

萬清華

○第百二十五集 尾上兼英・小島昌治・

松本昭教授退職記念号

(一九九九年二月発行)

尾上兼英・小島昌治

○第百三十六集 (一九九九年三月)

ヘーゲル最初の哲学体系構想

—イエーナ大学「哲学序論」講義草稿の考察—

マイトラーヤニーヤ・ウパニシャッド (3)

伊坂青司

マイトラーヤニーヤ・ウパニシャッド (3)

伊坂青司

伊坂青司

（座談会）わが戦後中国学事始め

<p>ユステ修道院におけるカルロス五世 (4)</p> <p>（翻訳）コヴェントリー＝サイクル劇 (V)</p> <p>『ヨーロッパの都市と思想』</p> <p>—水田洋氏における書評の政治学—</p> <p>（史料紹介）「観音寺日譜」(1)</p> <p>（京都府乙訓郡大山崎町観音寺所感）</p> <p>—延喜元年日譜①</p> <p>イギリス・ロマン派の詩と絵画における自然</p> <p>—ブレイク、ワーズワス、</p> <p>ターナーとコンスタブル—</p> <p>岩崎 豊太郎</p>	<p>湯田 豊</p> <p>藤田 一成</p> <p>橋本 侃</p> <p>湯田 豊</p> <p>石井 日出男</p> <p>小泉先生のこと —思い出すままに—</p> <p>普遍的存在論と「本当に普遍的な存在論」</p> <p>—『ブリタニカ百科事典』項目論文</p> <p>「現象学」執事をめぐつての</p> <p>フッサールとハイデガー—</p> <p>F・V・ディキンズ・南方熊楠共訳の日本文学</p> <p>日本におけるトルストイの原像</p> <p>他宗教理解と三位一体論</p> <p>（翻訳）コヴェントリー＝サイクル劇 (VII)</p> <p>ワーズワスの崇高について</p> <p>日本語動詞の多義体系 (2)</p> <p>中国的娼妓隠語 —秘密語研究 (3) —</p> <p>（学会報告）21世紀の英文法の未来は？</p>	<p>（翻訳および解説）湯田 豊</p> <p>（翻訳）コヴェントリー＝サイクル劇 (V)</p> <p>『ヨーロッパの都市と思想』</p> <p>（史料紹介）「観音寺日譜」(1)</p> <p>（京都府乙訓郡大山崎町観音寺所感）</p> <p>—延喜元年日譜①</p> <p>イギリス・ロマン派の詩と絵画における自然</p> <p>—ブレイク、ワーズワス、</p> <p>ターナーとコンスタブル—</p> <p>岩崎 豊太郎</p>
<p>○第百三十七集（一九九九年九月発行）</p> <p>ブロッキーとレニエ</p> <p>—ヴェネツィアと文人たち (22) —</p> <p>（研究ノート）「明六雑誌」の中の英國詩人</p> <p>（翻訳）コヴェントリー＝サイクル劇 (VI)</p> <p>（史料紹介）「観音寺日譜」(1)</p> <p>（京都府乙訓郡大山崎町観音寺所感）</p> <p>—延喜元年日譜②</p> <p>石井 日出男</p>	<p>鳥越 輝昭</p> <p>秋山 勇造</p> <p>橋本 侃</p> <p>秋山 勇造</p> <p>鈴木 修一</p> <p>八島 雅彦</p> <p>岸根 幸彦</p> <p>岩崎 豊太郎</p>	<p>（翻訳）コヴェントリー＝サイクル劇 (VII)</p> <p>ワーズワスの崇高について</p> <p>日本語動詞の多義体系 (2)</p> <p>中国的娼妓隠語 —秘密語研究 (3) —</p> <p>（学会報告）21世紀の英文法の未来は？</p> <p>古岩井嘉蓉子</p>
<p>○第百三十九集（二〇〇〇年三月発行）</p> <p>文革中における中国語絶対敬語の復活と</p> <p>その社会的背景</p>		<p>（翻訳）コヴェントリー＝サイクル劇 (VII)</p> <p>ワーズワスの崇高について</p> <p>日本語動詞の多義体系 (2)</p> <p>中国的娼妓隠語 —秘密語研究 (3) —</p> <p>（学会報告）21世紀の英文法の未来は？</p> <p>古岩井嘉蓉子</p>

Glosas Silenses研究VII

寛容と共生へ向かつて

—デリーベスの捉らえた内戦—

中国民間数字隠語 —秘密語研究 (2) —

石林

太田強正

中村美子

石林

—— <u>寛延</u> 二年日譜①	石井	日出男	—— <u>寛延</u> 二年日譜②	石井	日出男
ワーズワースの想像力と湖	岩崎	豊太郎	太田南畝の狂詩の文法	石井	日出男
スピーチ・アクト理論と	岩本	典子	マシャード・デ・アンスの生との和解	浅山佳郎・嚴明	
応用言語学におけるその有用性	古岩井嘉蓉子		——『プラス・クーバスの死後の回想』と		
〔研究ノート〕多言語多文化社会スイスの実状			『アイレスの覚書』から見えてくるもの——武田千香		
チヨーサー没後600年					
——中世詩研究の今——	奥田	宏子			
○ <u>第百四十三集</u> 古川知生教授退職記念号					
(一〇〇一年九月発行)					
古川先生の人間学					
——長い間ありがとうございました——	矢野	博			
フィリピン国立銀行と通貨制度の再建	永野	善子			
S・ハイム対第11回中央委員会総会	塚田	眞幸			
自然から生成する精神	青木	康征			
—— <u>ヘーゲル「一般哲学概説」</u>	伊坂	青司			
講義草稿(二)の考察					
〔研究ノート〕唯識の体系					
——研究のための一つの戦略——	湯田				
(翻訳)コヴェントリー＝サイクル劇(Ⅺ)	橋本				
〔史料紹介〕「観音寺日譜」(3)	侃	豊			
(京都府乙訓郡大山崎町観音寺所蔵)					
〔講演記録〕中国山西省における日本軍性暴力に関する調査について					
『天うつ浪』のなかの二一チエ					
中国稱作文化東傳日本再探					
チリ・少数独裁共和制から民衆の政治参加へ	石井	日出男			
モルモガデラバガ	石田	米子			
金鈴木修一					
健人					

（翻訳）エグリア巡礼記

太田強正

主不在の研究室

鳥越輝昭

○第百四十五集 篓敏生先生追憶号

（一〇〇二年三月発行）

（翻訳）コヴェントリー＝サイクル劇（XIV）
（史料紹介）「観音寺日譜」（5）
（京都府乙訓郡大山崎町観音寺所感）

橋本日出男

篓敏生先生を悼む
断章

石井加藤宏紀

篓君どうも有難う
篓さんのこと

日高昭二

篓先生からのお言葉
篓先生との思い出

中島三千男

女詐欺師の登場する風景

三鬼清二郎

—サウスワース『見えざる手』

高島昭二

フェルスターとヴィヘルン

松本佳郎

—フェルスターのヴィヘルン評価について—
（翻訳）コヴェントリー＝サイクル劇（XIV）
（史料紹介）「観音寺日譜」（4）

山口ヨシ子

（京都府乙訓郡大山崎町観音寺所感）
—宝曆二年日譜（2）

大西勝也

（翻訳）コヴェントリー＝サイクル劇（XIV）
アルプスと崇高—ワーズワースとターナー
（研究ノート）戸籍制度とジエンダー

石井橋本侃

岩崎日出男

星野豊太郎

澄子

○第百四十六集 松山正男教授退職記念号
（一〇〇二年九月発行）

現代社会における都市景観と住民
—谷中・三崎坂を事例として

竹中宏子

（1973—1989）
（上）

（下）

○第百四十七集 佐野正巳先生追憶号

（一〇〇一年十二月発行）

現代中國語の「時制」の意味研究

日高昭二

佐野正巳先生を悼む
佐野正巳さんのこと

高野繁男

佐野先生のこと

浅山佳郎

F・シュライエルマッハーハーの批判的考察
についての批判的考察

大西勝也

『コリン』、ヤンカ、ミールケ
『山月記』の季節について

大塚田眞幸

『コリン』、ヤンカ、ミールケ
『山月記』の季節について

鈴木侃

（翻訳）コヴェントリー＝サイクル劇（XV）
西周『致知啓蒙』を読む（上）

三浦吉明

（翻訳）コヴェントリー＝サイクル劇（XV）
西周『致知啓蒙』を読む（上）

大西勝也

（翻訳）コヴェントリー＝サイクル劇（XV）
西周『致知啓蒙』を読む（上）

大塚田眞幸

女の職業としての詐欺師

—オルコット「仮面の陰で」「V・V」など

「観音寺日譜」(5)

(京都府乙訓郡大山崎町観音寺所蔵)

—宝暦九年日譜(2)

山口ヨシ子

コヴェントリー＝サイクル劇(XVI)

『明六雑誌』の発行と廃刊について

关于现代汉语动词配价研究的几点思考

中国語動詞価理論に関する一考察

徐峰　秋山　橋本　石井　日出男

勇

造

侃